神宿る石－豊北町域の庚申塚を探る－

矢都村　典子

1．はじめに

昨今、田舎の風景が変容しつつある。過疎化による農業の担い手の減少によって、人の手が入らなくなり荒れ果てた田畑が増えた。また、人里に現れるようになったシカやイノシシ、サルといった野生動物による農作物の食害が増え、田畑の周囲を高い防獣柵で囲むようになった。しかし、無機質な柵の傍らに、あるいは路傍に、変わらない原風景の名残を垣間見ることができる。人々が祈りを込めて綯（な）った注連縄がかけられた石塔や庚申塚[1]は、移り変わりゆく田舎の風景を見守る農村信仰の象徴である。

一般に庚申とは、干支[2]の庚申（かのえさる）の日のことをいい、これに関わる信仰を庚申信仰という。来歴は明らかではないが、中国の道教が起源とされ、日本では平安時代に貴族や僧侶によって庚申の日に「守庚申」や「庚申御遊（こうしんぎょゆう）」がおこなわれていた。

「守庚申」とは、道教の三尸（さんし）[3]に関わるもので、人間の体内にいる三匹の虫が庚申の夜に眠っている身体から抜け出て、天帝にその人物の罪過を報告しに行くので、庚申の日の夜は眠らずに過ごすというものである。平安時代の貴族たちはこれを守るため、「庚申御遊」と称して内宴を催したり雅楽を演じ詩作をしたりして朝まで過ごした。この「守庚申」は中世になると庚申の「申」を猿とし、猿を神の使いとする山王信仰[4]と結びつけられ、武士や農民の間でも盛んにおこなわれるようになり、江戸時代には全国に広まったとされている。この頃になると、仏教における青面金剛（しょうめんこんごう）[5]・帝釈天[6]が三尸を押さえ込む神として信じられ、さらに庚申を猿田彦と解釈する神道的な解説も登場するようにもなった。また、農村や山村ではこれらの新たに付随された解釈の他に、塞（サエ）の神[7]、道の神、作神等とも結び付けられるようになり、日本の民俗信仰が習合して多様な庚申信仰ができあがったが、いずれも単に庚申という神として祀られ、無病息災や長寿などの現世利益の信仰を集めている[8]。

このようにして広まった庚申信仰によって、全国では庚申講が組織され、沖縄を除いた各地で庚申さんの供養や講の記念のために庚申供養塔、所謂「庚申塚」が造立されるようになった。

下関市域でも例に漏れず庚申塚が各地区で造立されており、1969 年に下関郷土会の中西輝磨氏が下関市域の庚申塚の調査を開始し、1974 年から 1975 年にかけて会誌「郷土」にて調査結果を発表しているが、その調査範囲は旧下関市域に留まっている。豊北町域では 1986 年から豊北郷土文化友の会の沼尻正夫氏が調査をおこない、1987 年発行の「にぎめ　第 4 号」にて調査結果が発表されているが、氏の郷里である阿川地区の範囲に留まっている。豊北町全域の庚申塚の所在地は「豊北町史二」に記録されているが、簡単な端書きしかされておらず、造立地点の特定が困難であり、更に刊行当時から耕地整理や河川・道路の改修工事が進んでいるため、移転や撤去を余儀なくされた庚申塚も多く、実態が把握できていないのが現状である。

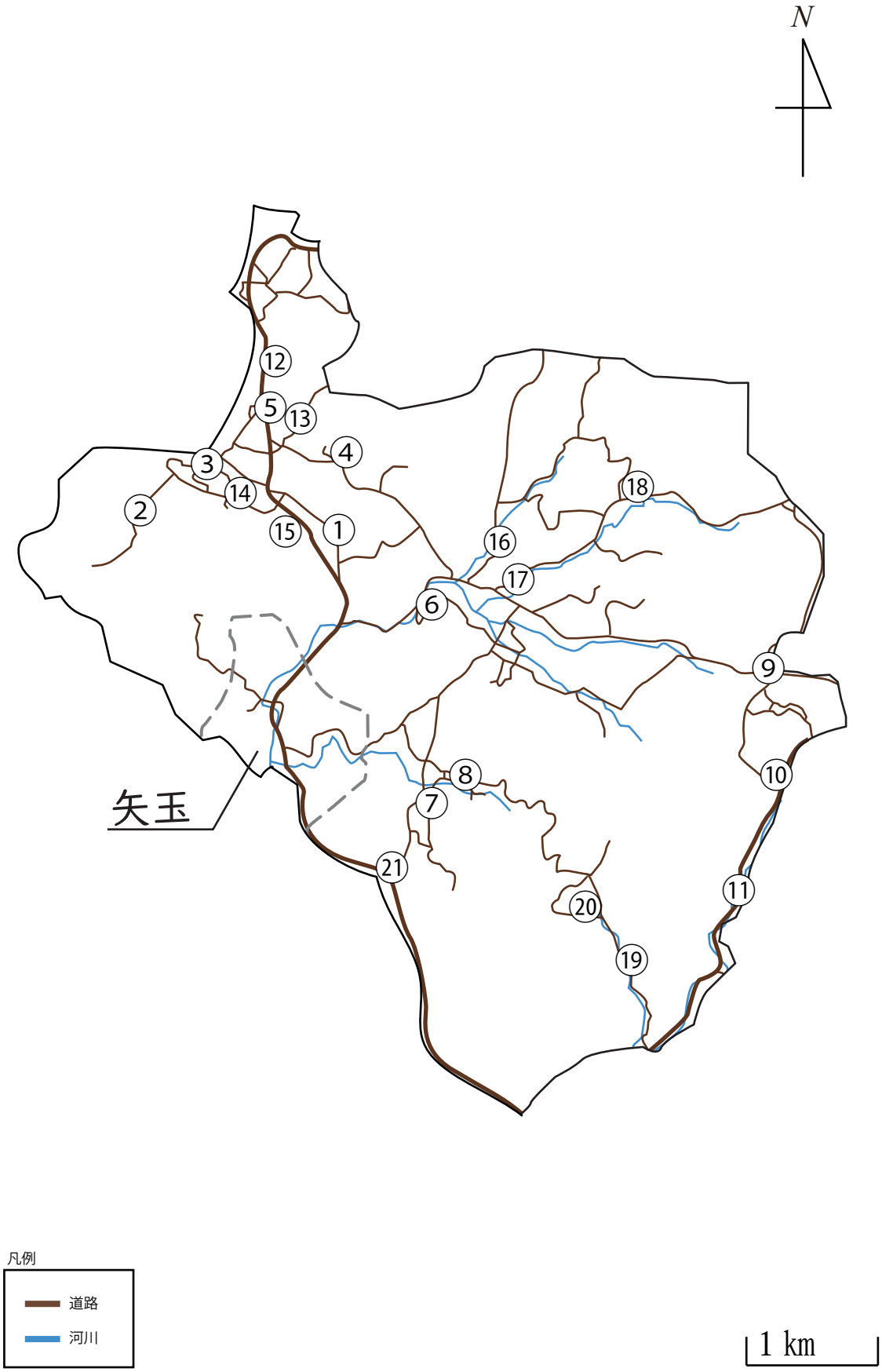
そこで今回、町内全域の庚申塚の所在を明らかにし、碑形や刻銘、飾り等の特徴をまとめ祭祀方法について調査をおこなったので、その報告をする。

【図１】豊北町内庚申塚位置図 [11]

【表１】庚申塚総数と造立地

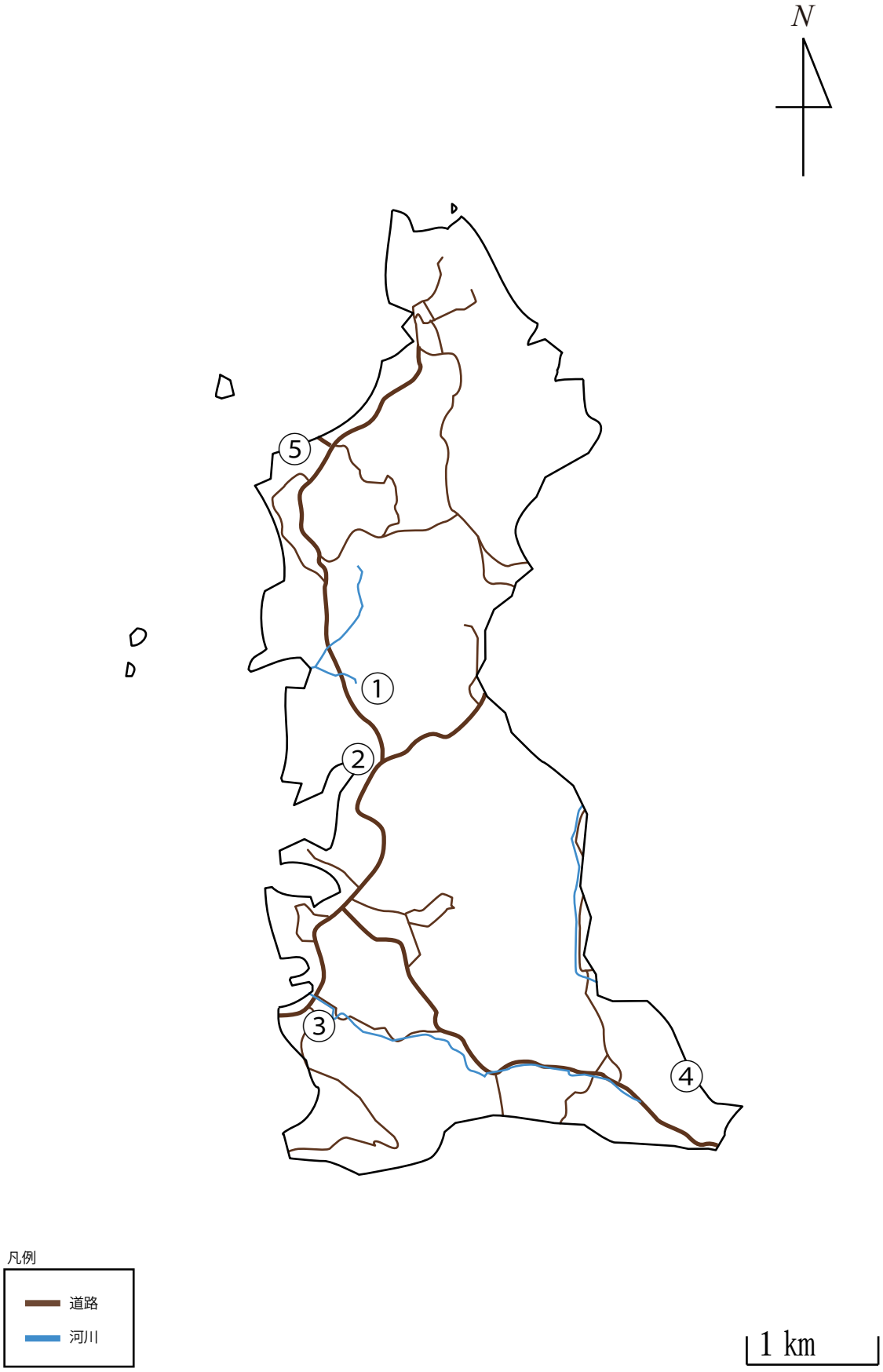
地区	路傍	水田横	山べり	川べり	神社境内	民家入口（或いは敷地内）	所在地	塔数
神田上	18	1				2	21	21
神田	4		1				5	5
滝部	7		3	1			11	12
田耕	10	3	3	2		2	20	20
北宇賀	6	1	3				10	10
阿川	11	1	2	3			17	18
粟野	4	1		1	1		7	8
角島	4						4	4
合計	64	7	12	7	1	4	95	98

※図中の番号は後述【表３】豊北町内庚申塚一覧の番号に該当



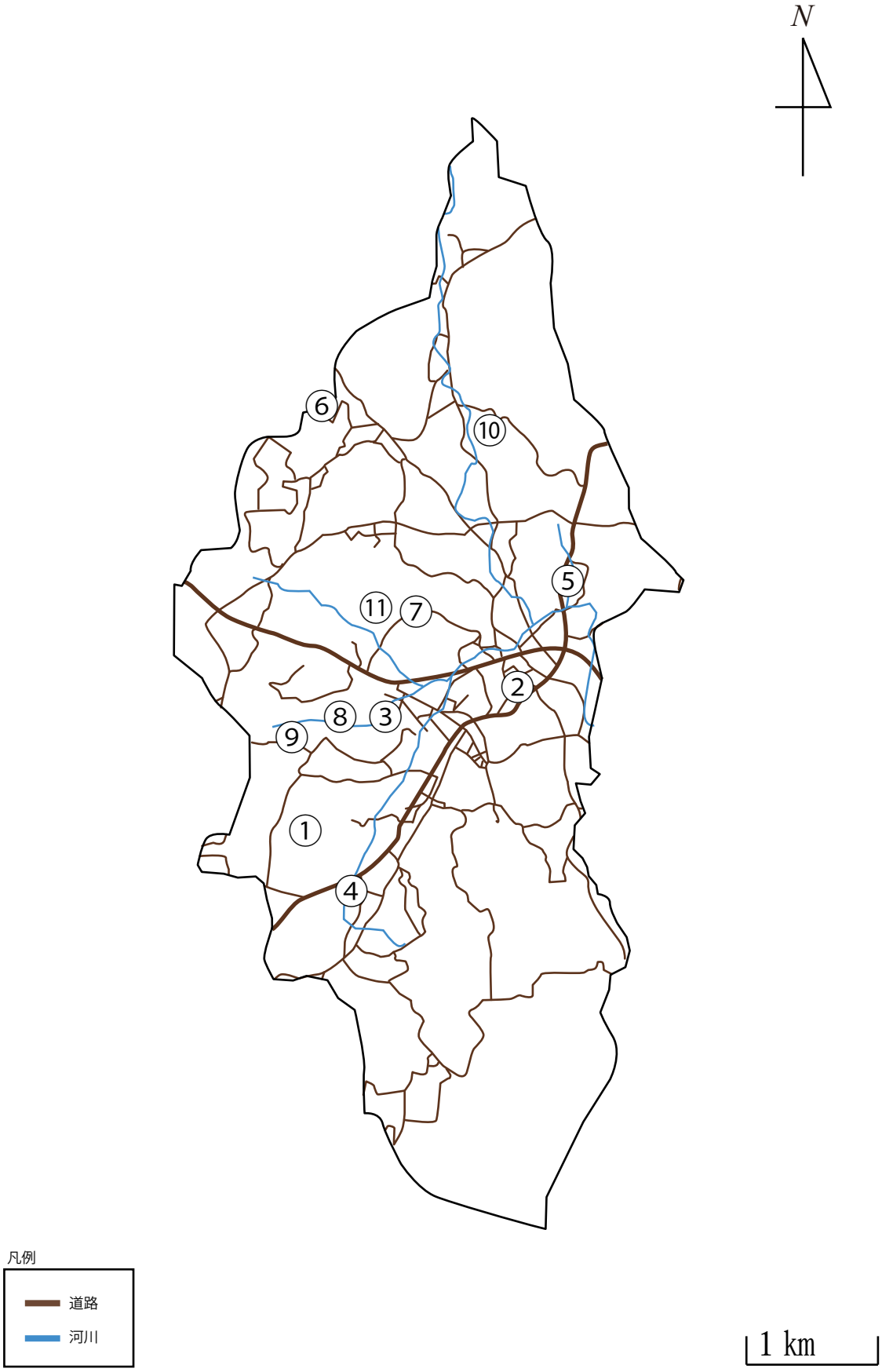
【図 2】神田上・矢玉地区庚申塚位置図

※図中の番号は後述【表３】豊北町内庚申塚一覧の番号に該当



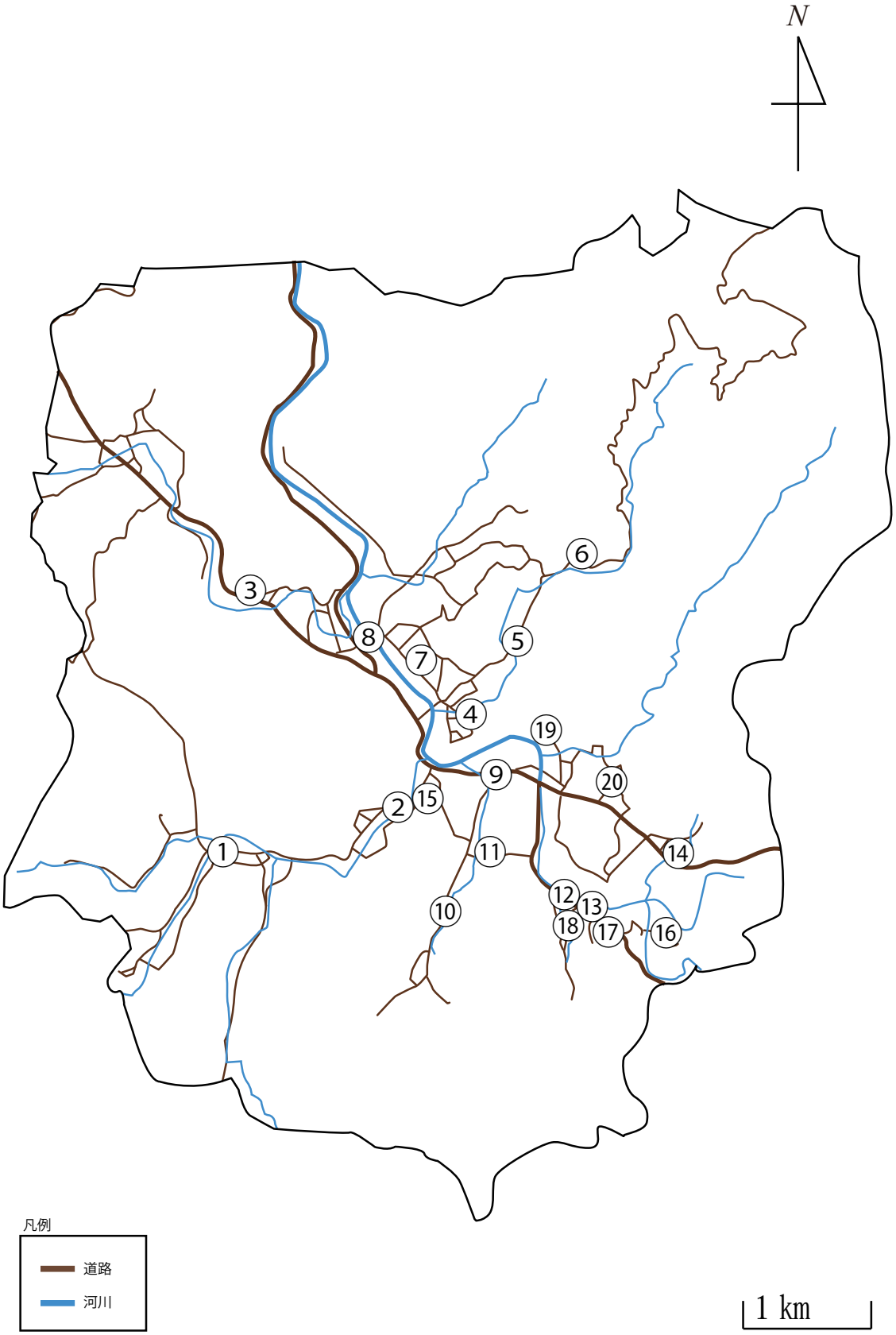
【図 3】神田地区庚申塚位置図

※図中の番号は後述【表３】豊北町内庚申塚一覧の番号に該当



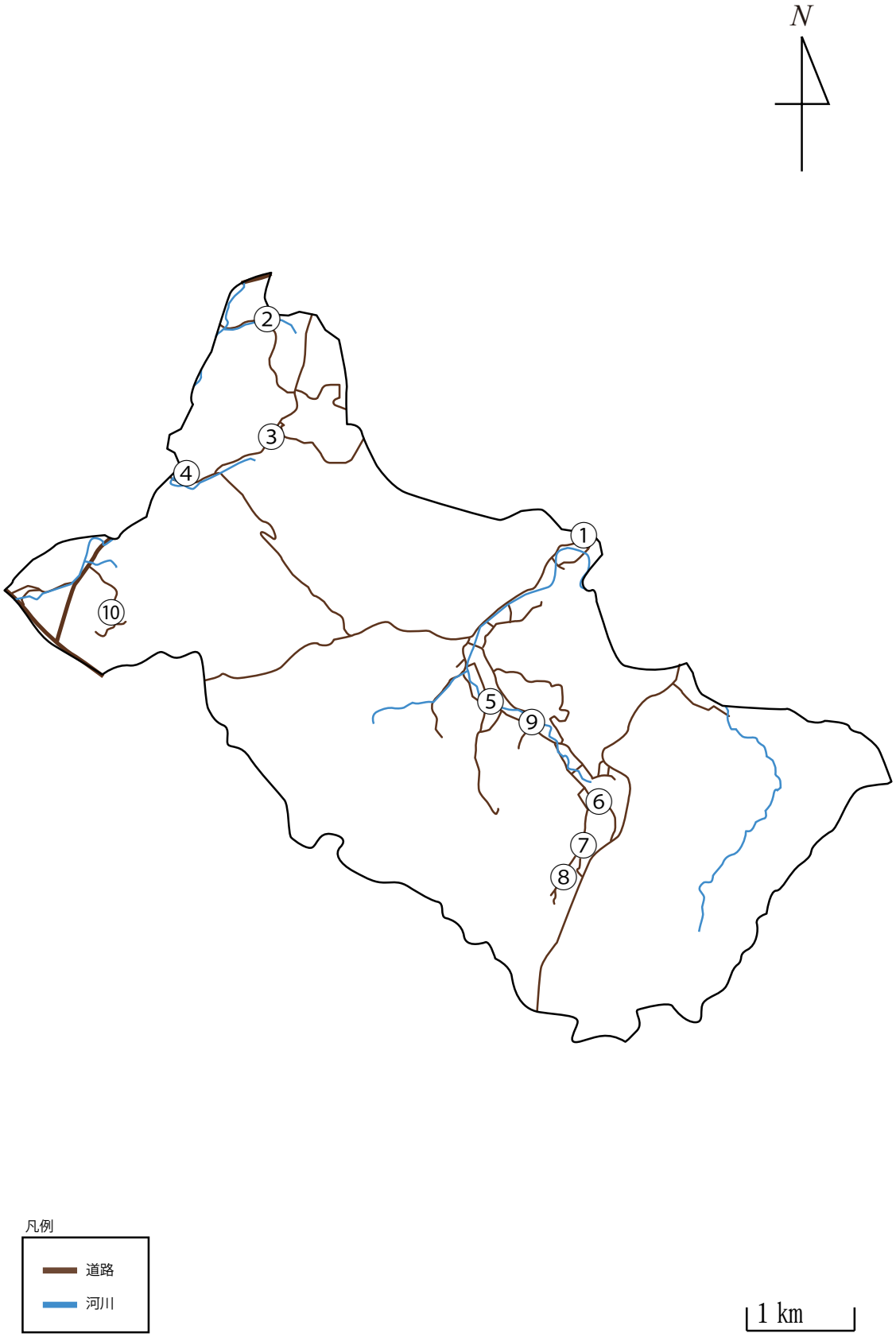
【図 4】滝部地区庚申塚位置図

※図中の番号は後述【表３】豊北町内庚申塚一覧の番号に該当



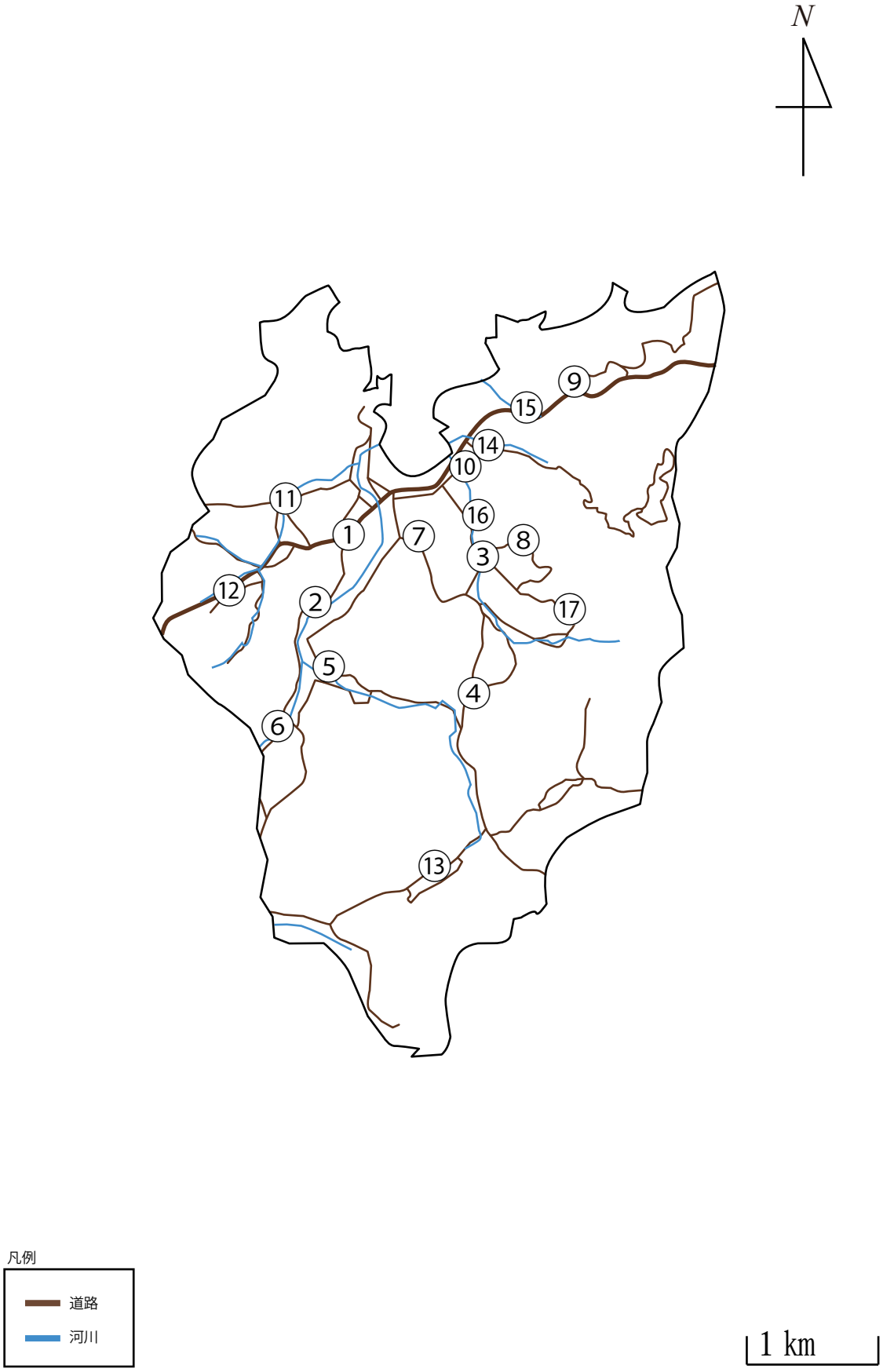
【図 5】田耕地区庚申塚位置図

※図中の番号は後述【表３】豊北町内庚申塚一覧の番号に該当



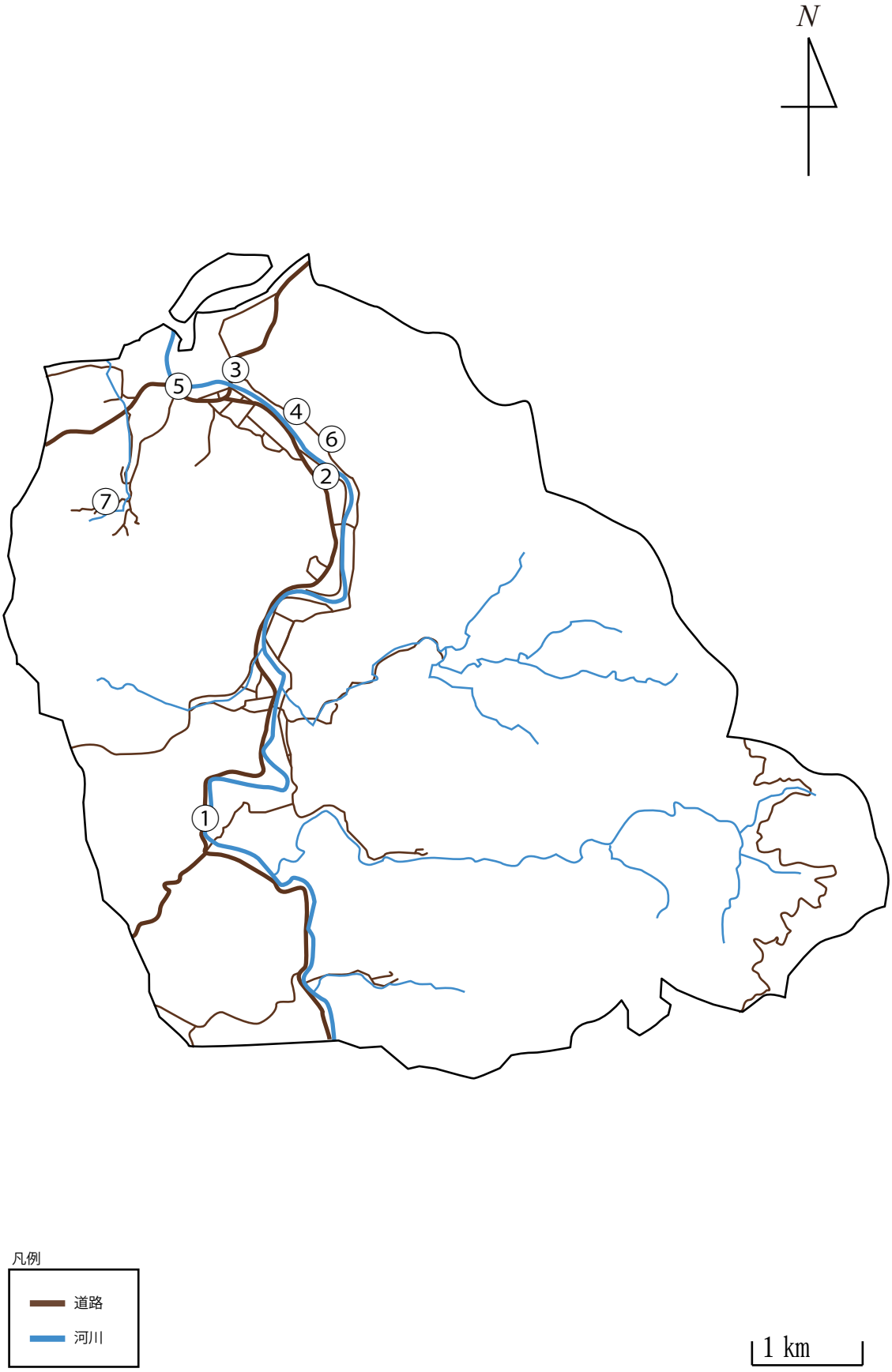
【図 6】北宇賀地区庚申塚位置図

※図中の番号は後述【表３】豊北町内庚申塚一覧の番号に該当



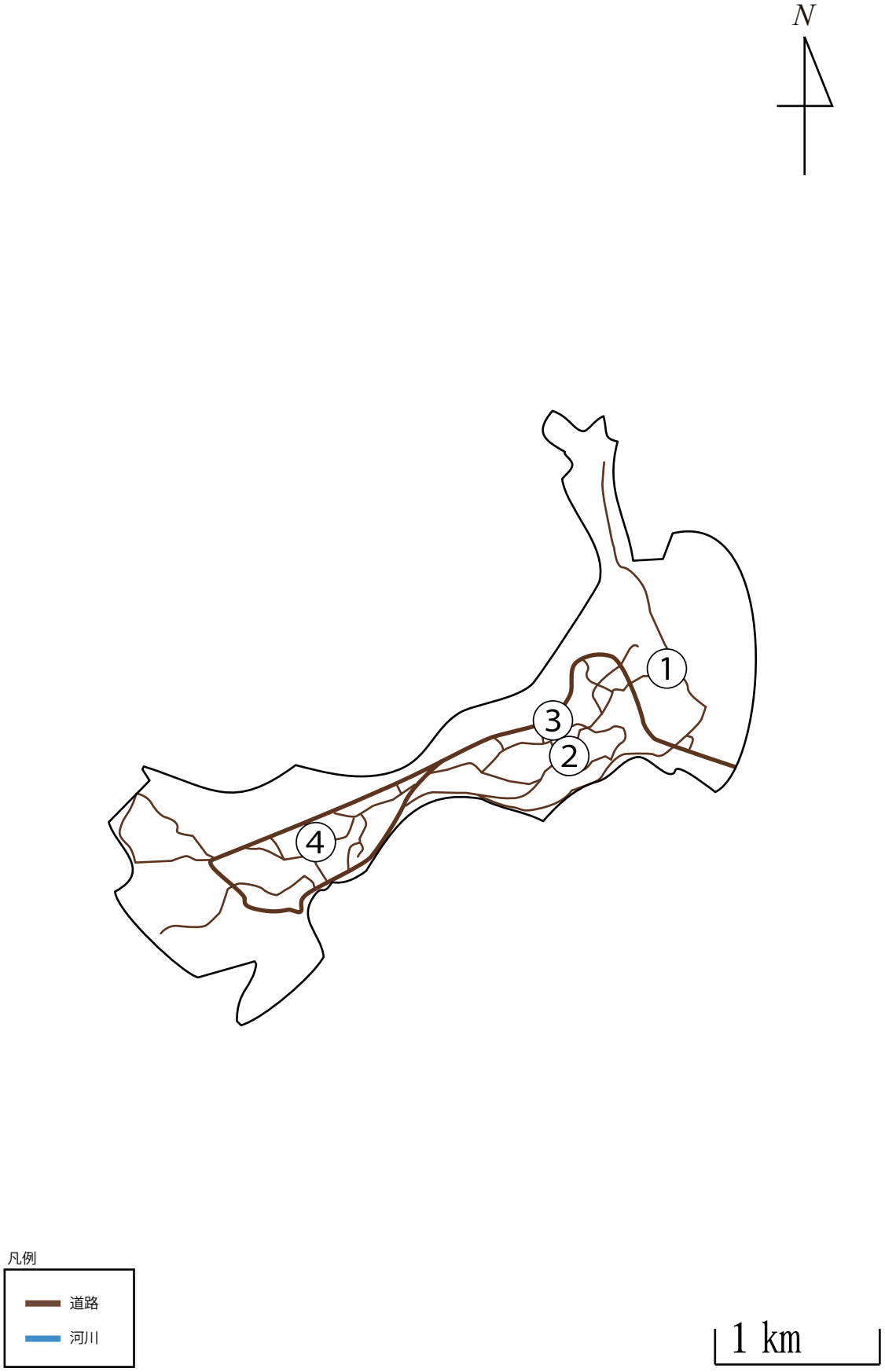
【図 7】阿川地区庚申塚位置図

※図中の番号は後述【表３】豊北町内庚申塚一覧の番号に該当



【図 8】粟野地区庚申塚位置図

※図中の番号は後述【表３】豊北町内庚申塚一覧の番号に該当



【図 9】角島地区庚申塚位置図

2. 豊北町の庚申塚

豊北町域の庚申塚の所在、現状を明らかにするための方法として、インターネット上にある地図アプリ[9]を活用して事前におおよその場所を特定し、現地に赴いて調査をおこなった。また、一部のストリートビュー機能で確認できない場所は現地捜索と地域住民への聞き込みによって調査をおこなった。

2－1．分布

豊北町内には 95 基の庚申塚があるとされていたが[10]、実際に調査で所在を確認すると 95 地点 98 基あった。図 1 は豊北町内で確認できた庚申塚の分布図である。

最も多く庚申塚の所在を確認できたのは神田上地区で、21 地点 21 基の所在が判明している（表 1）。次いで多い田耕地区の庚申塚のうち 2 基（図 5 の⑰・⑱）は、地域住民への聞き取り調査で庚申塚ではないかと言われたため地図上に記載しているが、⑰は元寇史跡の継石[12]という石塔であるとされ、⑱も建立されている敷地の所有者によると虚無僧墓であるといわれている。しかしながら、時代の変遷によって伝承が変化し、新たな伝承として引き継がれている事例として興味深く、これらも庚申塚として記載することにした。また、阿川地区は過去の調査[13]で 20 基の所在が確認されているが、今回の調査では 17 地点 18 基しか確認できなかった。

庚申塚が建立されている場所は路傍、水田横、山べり、川べり（橋の袂）、神社境内、個人宅の門前などである。特に路傍に立つものは三叉路に建立されているものが多く、道沿いにあるものは村落の境に立てられているものが多かった。

その他、地蔵や大師堂、石灯籠の横に立てられているものも見られた。

2－2．造立年

庚申塚造立の最初のピークは江戸時代の元禄から享保の頃（1688 ～ 1736 年）で、文化から天保（1804 ～ 1845 年）に最後のピークを迎え、その後は次第に衰えたといわれている[14]。豊北町の造立年の刻字が確認できたものは以下の 6 基である。

【表 2】造立年が確認できた庚申塚

地区	No.	小字	造立年	刻字
滝部	7	中村	2003	「道祖/2003　西」
滝部	11	中村	1783	「猿田彦大神」「天明三癸卯十二月吉日（側面）」
田耕	20	小野	1925	「大正十四年八月十日定之/道願」「六月二十六日記（側面）」
阿川	6	土井	1783	「天明三癸卯/猿田彦大神/施主　秋枝正之」
阿川	17	河内	1837	「幸神/天保　酉十月」
角島	1	辻方	1839	「猿田彦大神/天保十年」

このうち造立が最も古いのは阿川土井の線路脇に走る旧道の山べりのもの（【表 3】阿川地区 No.6）と滝部中村の道路沿いのもの（【表 3】滝部地区 No.11）で、造立は天明 3（1783）年であるが、

12 月と刻銘された滝部中村のものに対し、阿川土井のものは詳細な月日が刻銘されておらず、どちらがより古いかは定かでない。

造立年最後のピークであった天保期に作られた庚申塚は阿川と角島に確認できる。また、刻字はないが角島辻ヶ浜の庚申塚は嘉永 3（1850）年造立とされている[15]（【表 3】角島地区 No.4）。最近では滝部中村にある豊北総合グラウンド内のものが平成 15（2003）年に造立されている。平成 6（1994）年に編纂された「豊北町史二」では 95 基の庚申塚が確認されていることから、豊北町内においてその後の平成年間に造立されているのは非常に珍しい事例と思われる。

2 － 3．碑形

全国で見られる庚申塚の形は自然石・櫛型・舟形・方形・宝塔形・板碑など様々あるが、基本的には板状の自然石が多いように思われる。豊北町内に見られる庚申塚のほとんどが自然石で、稀に形の整った櫛形や方形があった。なかでも最も新しいとされる滝部中村の庚申塚は、丸い石が二つ並べられ、各々に「道」「祖」と刻字されていて町内では他に類を見ない形をしている。

2 － 4．基壇

一段のものが多く、コンクリートで舗装され基壇を整えたものもあったが、なかには無壇ないし、石で囲まれているものもあった。

2 － 5．刻銘

豊北町の庚申塚は、刻字の無い無銘の自然石の他に「庚申」「幸神」「猿田彦大神」「猿田彦命」「道祖」あるいは「道祖神」と刻んだ文字塔がある。一方で全国的に見られている刻像塔や「青面金剛」「かのえ申」といった刻字は見られなかった。

2 － 6．飾り

豊北町では庚申塚にかける飾りは注連縄飾りが一般的で、これと共に申緒（サルオ）という飾りを置く地域もある。申緒は犂を使った牛馬耕をおこなっていた戦前から昭和 30 年代頃の犂と牛馬をつなげる藁緒の名称で、すぐり藁を三本束にし、左巻きに綯うのが特徴である。

庚申塚にかける注連縄と申緒を作るマツリを豊北町では総じて「申緒打ち」というが、北宇賀地区の上畑では「百姓始め」、角島では「仕事始め」、滝部久森では「綱打ち」と言われ、農具として使う申緒や手緒（てお）と一緒に作られていた。

飾りの形は地域ごとに差異があるが、一番多く見られるのは①注連縄をかけ、申緒を置いたものである。その他に、②石塔上部に注連縄のみかけているものや、③石塔の横あるいは正面に御幣を立てているもの、④それ以外の特徴を持つものも見られた。

また、申緒打ちをおこなわず、既製品の注連縄を使用しているところもあった[16]（【表 3】神田地区 No.3、北宇賀地区 No.10）。

①注連縄をかけ、申緒を置いたもの（写真 1）

注連縄をかけ、申緒を置いた庚申塚は 98 基中 39 基に及び、このうちの 30% は神田上地区に見られる（【表３】神田上地区 No.1,3,5,6,7,8,9,12,13,14,15,16,17）。また、北宇賀地区と阿川地区にも多く、なかには注連縄がなく申緒のみ置かれた庚申塚もあった（【表３】北宇賀地区 No.6,8）。

②石塔上部に注連縄のみかけているもの（写真 2）

石塔上部に注連縄のみをかけた庚申塚は 98 基中 28 基あり、田耕地区に多く、神田上にも見られる（【表3】田耕地区 No.1,2,4,5,6,7,8,9、神田上地区 No.2,4,10,11,19,20,21）。また、滝部地区の農村部などにも見られる。更に田耕地区では石塔中央に細い注連縄で御幣を固定している庚申塚も見られた（【表３】田耕地区 No.4,5,6,7）。

③石塔の横、あるいは正面に御幣を立てているもの（写真 3）

申緒が無く御幣のみが立てられた庚申塚は阿川河内に 2 基、粟野郷東に 1 基見られた。そのうち阿川地区河内にある庚申塚の 1 つは、御幣の横に榊を活ける花筒が括り付けられていた（【表 3】阿川地区 No.8,17、粟野地区 No.4）。

④それ以外の特徴を持つもの（写真 4）

滝部地区神田口の庚申塚は、注連縄と小さな申緒がかけられている他に、石塔中央に注連縄で作られた飾りが付けられており、これは餅を表しているとされている。

【写真１】①タイプ（【表３】阿川地区 No.5 土井の庚申塚）

【写真２】②タイプ（【表３】田耕地区 No.7 杣地（そまじ）の庚申塚）

【写真３】③タイプ（【表３】粟野地区 No.4 郷東の庚申塚）

【写真４】④タイプ（【表３】滝部地区 No.1 神田口の庚申塚）

①～③以外の特徴を持つものの中には、申緒は無いが花筒が備わっているものがあった（【表 3】滝部地区 No.3）。また、角島地区の庚申塚は 4 基ある全ての飾りが異なっており（【表３】角島地区 No.1,2,3,4）、特に辻ヶ浜にある庚申塚は漁網を綯ってかけた「袈裟がけ庚申」ともいって、若者の結ばれたい願いを聞いて下さるといわれている[17]。

２－７．供物

飾りのほかに置く供物として、榊を注連縄に括り付けたり、基台に花筒のあるものはそこに榊を挿したりする。また水や御神酒をお供えする場合もある。

今回確認した 95 地点 98 基の庚申塚のうち、ほとんどのものは現在でも新しい飾りや供物があり、信仰対象として祭祀されていたが、そのうち 17 地点 20 基は飾りも供物も無く、祭祀をおこなっていないと思われる。

3．豊北町の庚申塚の特徴－要素と役割－

近世の庚申信仰では道教の三尸の虫の影響は薄れ、庚申そのものを様々な御利益のある神として祭祀礼拝するようになっている。豊北町の庚申も①田の神や作の神といった農耕神としての要素、②地神（土地の守護神）としての要素、そして③邪悪なものの侵入を防ぎ行路の安全を守る道の神や塞の神としての要素を担って祀られている。

①農耕神（田の神、作の神）としての要素

田の神、作の神は農耕をつかさどる神の一つで、ことに稲の豊穣を祈念する神である。豊北町内の農村部では庚申塚が開墾地の方に向かって建てられており、また、農作には水が重要であるからか、水田や用水路のそば、あるいは川べりにあるものも見られる。

豊北町内の各地の農村でおこなわれる農神を祀る地神祭では、災いがなく豊かな恵みがあるようにと祈念し、庚申塚のあるところでは寄り合って初庚申の申緒打ちをおこない、山の幸・海の幸を供えて一緒にお祭りするところも多い。その際、地神にささげる御幣を神官から切ってもらい、大きな御幣は自治会の境や庚申塚・道祖神に、小さな御幣は各自の家の庭や田圃の畔に立てる[18]。

②地神（土地の守護神）としての要素

地神（ジガミ）とは屋敷神の一種として宅地内の一隅（いちぐう）などに祀られる神である。屋敷神の神格は開拓先祖の霊であったり、身内の先祖であったりする祖霊的性格と、土地神もしくはそれに関連する作神（農耕神）的性格などが伝えられていて複雑である[19]。豊北町ではジガミではなくジジンと呼んで宅地内以外に造立されていることが多い。そのため、屋敷神というよりは村の守り神としてその区域に住むもの全てが氏子として祭に奉仕する義務や権利を持つ村氏神的な性格を強く有しており、産土神[20]や氏神[21]といった生まれた土地の守護神的な性格も持ち合わせていると考えられる。

③道の神、塞の神としての要素

道の神とは道路・旅行の安全をつかさどる神で、道祖神ともいわれ塞の神と習合されたものである[22]。

「道祖」あるいは「道祖神」と刻字された庚申塚は、道の神としての要素を強く持っているものと考えられる。また、庚申塚の刻字に見られる「猿田彦大神」は国つ神の一つで、天孫降臨のときに道先案内をつとめたことから道案内の神として道祖神に習合された。

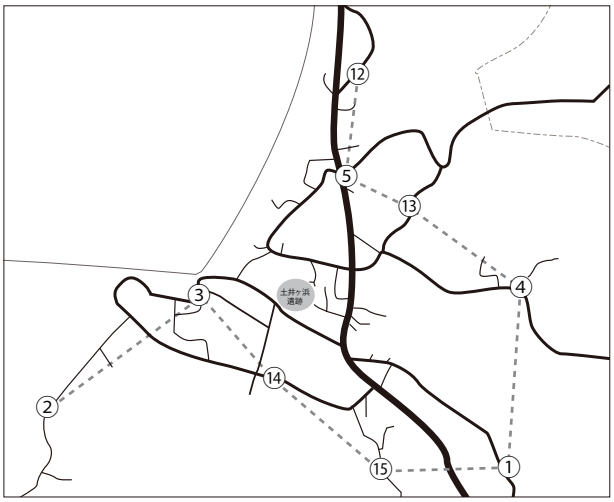
祭事を正月におこなう地区が多い理由としては、一般に道祖神の祭日が小正月にあたる 1 月 15 日であることも考えられる。

２節１項の「分布」でも述べたように、豊北町内の庚申塚は三叉路と村落や地区の境に立てられているものが多い。村落を中心に考えたとき、村境は異郷や他界との通路であり、遠くから来臨する神

や霊もここを通り、また外敵や流行病もそこから入ってくると思われていた。それらを祀り、また防ぐために設けられた神をサエ（＝塞、障）の神[23]ということから、三叉路と村落や地域の境に位置するものは、塞の神の要素をもつ。

道沿いや村落の境に建立された事例の他に、土井ヶ浜遺跡周辺の庚申塚を見ると、海岸沿いから土井ヶ浜遺跡を囲むように配置され、非常に興味深い配置をしていることがわかる（図 10）。

土井ヶ浜遺跡周辺の庚申塚は下図のように点在している。土井ヶ浜周辺の響灘沿岸沿いには蒙古来襲伝承に結びついた、多くの「祟り」の伝承地がある。また、発掘された「骨」＝「墓」＝「死」に繋がる空間として捉えられていることから、この世とあの世が密接に繋がる場所、即ち土井ヶ浜を囲むように庚申塔が配置されているのは災厄が居住地に侵入してこないように防ぐような意味合いがあったのかもしれないと考えられる[24]。



【図 10】土井ヶ浜遺跡周辺庚申塚位置図

祭祀の際に、神官から御幣を切ってもらい、大きな御幣を自治会の境や庚申塚・道祖神に立てるのは、外敵の侵入を防ぐ障壁と考えられる。そして、小さな御幣を各家の敷地内や田圃の畔に立てるのは、災難除けや豊穣を祈念するためと考えられ、全ての要素を含んだ重要な儀礼であることがわかる。

4. 庚申塚の祭祀方法

講とはある目的を達成するために結ぶ集団のことを指し[25]、庚申講とは、庚申信仰の信者たちによって組織された宗教的講である。庚申講は年六回ある庚申の日の夜に集まり「庚申さん」あるいは「庚申様」と呼ばれる本尊を前にして祭祀、勤行をおこない、飲食を共にしながら夜が明けるまで雑談や種々の娯楽に興じるもので、これは江戸時代の「庚申待」と呼ばれた行事の一般的な形式であったが、現在は徹夜することは少ない。

豊北町では年六回ではなく、12 月末から正月にかけての止庚申（一年のうちで最後の庚申の日）か初庚申（一年の内で最初の庚申の日）に近い適当な日を選んでおこなわれる（角島では 1 月から 3 月の間におこなわれる）。

2 節 6 項でも述べたように、この行事は豊北町では申緒打（さるおう）ちと呼ばれており、祭りの日あるいは祭りの前日に飾りの申緒打ちをおこない、神事を終えると石塔に申緒をかけ、講内の者で集まり飲食を共にする。一般的に庚申さんの本尊は青面金剛や猿田彦大神が描かれた軸や刻像であるが、豊北町内でそのような本尊を飾るのは、かつて北宇賀の上下畑地区で庚申の日に、当屋に見猿・聞か猿・言わ猿[26]の軸をかけ、小宴をしたときだけである。このとき切り餅が配られるが、その餅を食べると疱瘡にかかるので、「あばたの人で、なっと食うそにとらぬ」といって食べた[27]という事例が確認され

ている。

３節で述べた通り、庚申祭の多くは地神祭りの時に一緒に行われているが、神玉直子地区ではお伊勢講[28]と一緒におこない、田耕の川中曽、原、市庭地区ではお日待[29]と一緒に行われていた。これは庚申待の徹夜行事が月待、日待の習俗と結合して次第に一般化していったこととの関わりが認められる。また、伊勢講では朝日を拝む風習もあり、日待講と称することもあったため、無関係とは言い切れない。

４－１．祭祀の流れ　－神田上地区　辻ヶ畑自治会の事例－

祭祀の事例として神田上地区辻ヶ畑自治会で令和４年１月 10 日におこなわれたものを取り上げる。

辻ヶ畑自治会には庚申塚が２基（【表３】神田上地区 No.20,21）あり、それぞれが上組と中組の庚申塚とされているが、祭祀は同日におこなう。いずれも自治会内では庚申様ではなく「ジジンサマ」と呼ばれ、祭事も「地神祭り」と呼ばれている。祭りをおこなう日は毎年１月 10 日と決まっており、自治会内の稲作をおこなっている家が藁を持ち寄って申緒を作る。

申緒を作り終えたら自治会館内の床の間に各家が持ち寄った供物[30]と、各家に配る小さな御幣、庚申塚と自治会の境に立てる大きな御幣、榊、完成した申緒を並べ、神事をおこなう（写真５）。このとき、地神にささげる御幣は神官に切ってもらう[31]。神事の後、上組と中組の男性が分かれて申緒を庚申塚にかけに行く。庚申塚には御神酒、塩、水が供えられる。申緒をかける際の所作は、まず申緒をかけ、石塔の頭に御神酒をかける。そして石塔の周囲に塩を撒き、石塔の頭に水をかける（写真６）。最後に二礼、二拍手、一礼をして終了となる。

元々かけてあった古い申緒は庚申塚の横などに置かれ、朽ちるに任せており、日々何か世話をするようなことはしない。全ての神事が終了した後は、通常自治会館に集まり直会をおこなう。

このように、祭祀の流れとしては①申緒作り→②神事→③申緒かけ→④直会となっているが、2021 年と 2022 年は直会を中止し、仕出しの弁当を各家に持ち帰って食べている。これは一昨年より猛威を振るっている新型コロナウイルスの影響もあるが、それ以前から料理は寿司とアラ汁のみを作り、おかずは仕出しを頼んでいた。現在は男性が申緒を作っている間、女性は男性が申緒作りの休憩の時に取る軽食を作っている。

【写真５】自治会館での神事

【写真６】庚申塚に申緒をかける

4 － 2. 申緒の作り方　－神田上地区　辻ヶ畑自治会の事例－

申緒作りは神事当日、自治会館裏の倉庫で祭りが始まる前に男性が作る。手順は以下の通りとなる。①前年に収穫した稲藁を用いる。まず、房を作るための藁を水で湿らせ、木の槌で藁打ちをする（写真 7）。先端から順番に中心辺りまで叩く。その間、太い縄を作るために用意した別の藁を直径 5㎝ほどに束ね、根の方を縛る（写真 8）。

【写真７】藁打ち

【写真８】直径５㎝ほどに束ねられた藁

②打った藁で直径 1 ㎝ほどの房を付けるための小縄を 12 本綯う（写真 9）。小縄は一人で綯うことが出来るが、左綯いは難しく作れる人が限られる。辻ヶ畑自治会内には綯える人が現在 2 名しかいないので、毎年同じ人が小縄を作っている。その間に、残った男性陣で倉庫内の梁に梯子をかけ、①の藁束 3 本の根元を上にして、結び付けたものを梯子にかける。3 人が藁束を 1 本ずつ持ち、右に捩りながら、左隣の人に「せーの」といいながら左回しに廻し、3 つの藁束を交差させて編んでいく（写真 10）。太さが均等になるように、次の藁束を継ぎ足しながら綯っていく。太い縄を石塔にかける際、石塔の背面側は縄をビニールテープで固定するので、前面に必要な長さ（約 50 ～ 60㎝ほど）の縄を 2 本綯う。

【写真 9】小縄を綯う

【写真 10】太い縄を綯う

③綯い終えたら端を括り、はみ出た藁を鋏で切って整形する。その後、房を作る。房はまず小縄の先端に大きく括り目を作り、藁束の中心に括り目が来るように結び付ける（写真 11）。括り目から上部の藁束を下向きに折り、房状にしたら、上部を小縄で結ぶ。長さを揃えて切ったら、太い縄に房を付け、最後に神官に切ってもらった紙垂を付ける（写真 12）。

申緒打ちは、かつては上組と中組で分かれておこなっていたが、自治会の人数減少に伴い、現在は

【写真 11】房を作る

【写真 12】縄に紙垂を付ける

合同でおこなっている。昔は申緒も作っていたが、これも人数が減少し人手不足となったため廃止され、石塔上部にかける注連縄のみを作るようになった。

5. まとめ

豊北町内の庚申塔の所在を確認したところ、100 基近くあるうちの実に 8 割近くが未だに祭祀されていることは驚くべき調査結果であった。自治会の慣例として行っている地区もあるだろうが、それも町民の敬虔（けいけん）な信仰心が引き継がれている賜物であるといえる。しかし、なかには祭事の簡素化、飾りの形や素材の変化等も見られた。これは前提として過疎化によって祭祀参加者が減少したこともあるが、この 1 、 2 年のうちで変化が起きた地域では、新型コロナウイルス感染拡大防止対策として、自治会の人々が一堂に集まって申緒作りをおこなうことが出来なかったことが原因と推察される。また、既製品の注連縄に変えた地域では、毎年申緒を作る手間を省くためだけでなく、稲作をおこなわなくなり稲藁が取れなくなったからという生活の変化によるものもあった（【表 3】北宇賀地区 No.10）。

調査をおこなったなかには、今後は申緒打ちをやめようという声が挙がっている地区もあった。これは会社勤めの人が増え、祭りをする日に休みが取れないことや、過疎によって年々祭祀に参加する人が減少していることが原因と思われる。なかには祭事に割くお金がもったいないからという声もあり、世帯数の減少によって一軒一軒の負担が大きくなっていることや、コストパフォーマンスを第一に考える昨今の世相が反映されている結果といえる。

今後、庚申塚を祭祀する地区はますます減っていくことが予想される。殊に豊北町内には若い世代が少なく、神仏信仰に対する関心の薄れも顕著である。30 代の人に話を伺うと、意識したことがないので、住んでいる自治会内の庚申塚の場所すら知らないという声もあった。かつては講内で寄り集まることが娯楽の一つだったため、次世代にも自然に継承されていたが、今や若い世代が祭祀に参加することはほとんどなく、娯楽は自分の住んでいる地域外への外出、あるいはメディアやインターネットが主となっている。地域内の人々とのコミュニケーションが希薄になっていることが、継承を困難にさせている一端でもあるのだろう。

こうした継承の難しさに加味して、庚申塚は故事来歴の明らかでないものが多い。路傍の石塔が、かつて神として祀られていたことを知る人がいなくなるのも、そう遠くない未来かもしれない。

現在、庚申塚の所在地については更にいくつかの情報が寄せられている。また、今回の調査では所在地の確認を優先したため、庚申塚の計測データ等が不十分である。失われつつある父祖伝来の記録を詳細に残すためにも実態把握に努め、引き続き調査をおこないたい。

（謝辞）

本稿作成にあたり、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの吉留徹副館長及び、大藪由美子氏に多くのご配慮とご教授を賜り、資料収集を同ミュージアム資料収蔵室（当時）の中村久氏にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

注）

1．庚申供養塔は地域や世代により「庚申塚」とも「庚申塔」ともいう。「塔」とは仏陀の骨や髪、または一般に聖遺物をまつるために土石を椀形に盛り、あるいは煉瓦を積んで作った建造物（2008：広辞苑第六版：【塔】）であり、「塚」は土を高く盛って築いた墓（2008：広辞苑第六版：【塚】）とされているが、庚申供養塔はその広義に大別されることなく、東日本では多く「庚申塔」とよび、西日本では多く「庚申塚」とよばれている。豊北町域では一般的に「庚申塚」とよばれているため、ここでの呼称は「庚申塚」に統一する。

2．十干十二支のこと。干支の知識は中国から朝鮮を経て日本にもたらされ、暦日をはじめ方位や物事の順序をあらわすのに用いられた。十干はひと月を三分した十日（旬）を数える符号で、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸をいう。十二支は一年の月の呼び名とされ、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥をいう。それぞれの文字の意味は不明だが、元来十二支の漢字に動物の意味はなかった。十二支を月にあてる場合は寅から始めるのが暦の基本で、閏月があると 12 月も寅となる。十干と十二支を組み合わせて暦日を数えるが、歳に干支を配当したときは六十一年でもとにかえる。還暦あるいは本掛帰りといって、数え年の六十一歳を祝う風習はここから生じた。これらに陰陽五行説が結びつき、十干を兄と弟に分け、これに五行の木・火・土・金・水を配して、甲（キノエ）乙（キノト）丙（ヒノエ）丁（ヒノト）戊（ツチノエ）己（ツチノト）庚（カノエ）辛（カノト）壬（ミズノエ）癸（ミズノト）としている。こうした動物や自然物を用いた名称は、生まれ年からその人の性格や運勢を占ったりする性格判断など各種の占いや呪術を生み出すことになった。（1999：日本民俗大辞典　上：【干支】205 頁 -206 頁）

3．人の身体の中に棲んでいるといわれる虫。庚申の夜に人が寝ている間に天に上り、天帝に人の罪過を告げ、宿主の人間の寿命を縮めてしまうといわれる。『抱朴子』によると、鬼神や霊魂のたぐいで、人間が死ぬと三尸は鬼となって勝手に遊び歩いたり、祀られることができるので、つねに人の早死にをのぞんでいる。（1956：窪徳忠『庚申信仰』192 頁）

4．比叡山の東麓の大津市坂本に鎮座する日吉社を中心に展開された信仰。日吉山王信仰ともいう。大和の三輪から勧請された大宮（大比叡明神、西本宮）と地主神の二宮（小比叡明神、東本宮）を両所権現とする日吉社は、比叡山の開創期から関係が深く、早くに延暦寺の鎮守府にして日本天台宗の護法神となる。平安時代に入ると本地垂迹説により大宮は釈迦、二宮は薬師に比定され、鎌倉時代には山王七社（大宮・二宮・聖真子・十禅師・八王子・客人・三宮）を基軸に上中下の二十一社、ついで内外の百八社が成立し、威勢を誇った。山王の号は天台宗国清寺の鎮守神山王元弼（げんひつ）真君に名前に由来しており、山王信仰の教理面は叡山の学僧が形成した山王神道に負う。釈迦（のちの大宮権現）が発したという「我滅度の後、末法中に於いて大明神と現じ、広く衆生を度せん」（原漢文）の本誓や、「像法転時、利益衆生、故号薬師瑠璃光仏」という薬師にまつわる句文に山王信仰の要素を求めることができる。無仏時代の愚かな衆生を解脱に導き、また病悩を癒すという利生の現実性と普遍性から、山王信仰は貴族はもとより最下層の民の崇敬をも獲得し、やがて各地に分祠されていった。神使いの猿は、山王信仰の象徴としてつとに有名である。（1999：日本民俗大辞典　上：【山王信仰】732 頁）

5．顔の色が青い金剛童子。大威力があって病魔･病鬼を払い除く。四臂または六臂で､赤い三眼の忿怒相をしている。（2008：広辞苑第六版：【青面金剛】）

6．古代インドの太陽神・雷神であるインドラが仏教に取り入れられて、仏教を守護する神となったもの。須弥山の頂上に在って、部下の四天王を中腹の東西南北に配置し、仏法を守護するために、阿修羅と戦う存在とされている。また、その力は医術書『医心方』風病篇にも記されていて、風邪の治療薬を司る存在とされた。そのことから転じて、舟の舳先にこの薬を塗ると風や波の被害を受けないともされたようである。日本には比較的早期に伝わったようで、法隆寺の玉虫厨子の図に現れている。これは、釈迦の生前譚にあたる施身聞偈図で、身を投じた修行者が帝釈天に変身するというモチーフが描かれている。このほか東大寺法華堂や法隆寺金堂などにも古くからまつられた。特に密教寺院では金剛杵や独鈷杵を持って白象に乗る姿で描かれた。岡山県西北部では、死者の霊が湯灌の湯が沸くまでに備後東城（広島県）の帝釈天詣りをするとされており、死後の救済についての信仰も生じている。庶民の信仰を早くから集めた帝釈天には、葛飾柴又の帝釈天（題経寺　東京都葛飾区）があり、江戸の町人の信仰を集めた。（2000：日本民俗大辞典　下：【帝釈天】11 頁）

7．村や部落の境にあって、他から侵入する者を防ぐ神。邪悪なものを防ぐとりでの役割を果たすところからこの名がある。境の神の一つで、道祖神、道陸神、たむけの神、くなどの神などともいう。（2009：ブリタニカ国際大百科事典：【塞の神】）

8．小学館、2000、2007：日本歴史大事典：【庚申信仰】参考

9．調査には Google ストリートビュー（https://www.google.com/streetview/）を活用した。

10. 豊北町史編纂委員会、1994：豊北町史二「九　文化財　２石造物･喚鐘等（11）庚申塚」1173-1177 頁

11. 【図 1】豊北町内庚申塚位置図は国土地理院地図（www.gsi.go.jp）を元に作成した。

12. 蒙古の指令阿金の矢のささった首を切り、胴をさらに二つに切って埋め、そのしるしに三段の石を置いたという。これが後にいう継石である。（1983：豊北町教育員会「浜出祭伝承活動記録作成　浜出祭」83 頁）

13. 豊北町郷土文化研究会、1987：にぎめ　第 4 号「庚申塚」庚申信仰とその周辺 69 頁

14. 豊北町郷土文化研究会、1987：にぎめ　第 4 号「庚申塚」庚申信仰とその周辺 67-68 頁

15. 豊北町史編纂委員会、1994：豊北町史二「九　文化財　２石造物・喚鐘等（11）庚申塚」1174 頁

16. 既製品の注連縄は魚網に使われるような合成繊維で作られており、耐用年数が長く、毎年交換する必要のないものとなっている。

17. 豊北町史編纂委員会、1994：豊北町史二「九　文化財　２石造物・喚鐘等（11）庚申塚」1173 頁

18. 豊北町史編纂委員会、1994：豊北町史二「八　民俗　地神祭り（一月）」934 頁

19. 吉川弘文館、1999：日本民俗大辞典　上：【地神】748-749 頁

20. 産土神とは生まれた土地の守護神であり、その土地の鎮守社または祭神を自分の出自との関係で生まれながらの守護神と信じて、産土の神と称するものである。（1999：日本民俗大辞典　上：【産土】178 頁）

21. 氏神は先祖の霊が一定の年限を経ると子孫を加護する神になるというもので、もともと血縁で結ばれた氏一族の神は、地縁によって結ばれ地域共同体の守護神である産土神とは本来違うが、地縁のなかに血縁関係も生まれ、両者は同じように考えられるようになった。（1994：豊北町史二「２神道の民俗　氏神と産土神」925 頁）

22. 岩波書店、2008、2009：広辞苑第六版：【道の神】参考

23. 2009：ブリタニカ国際大百科事典：【塞の神】より引用

24. 下関市教育委員会　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム、2014：下関市文化財報告書 35　土井ヶ浜遺跡　第 1 次～第 12 次発掘調査報告書第 1 分冊「本文編」39 頁

25. 吉川弘文館、1999：日本民俗大辞典　上：【講】584 頁

26. 申と猿の音の共通によって庚申塔あるいは本尊の掛軸に「見ざる・聞かざる・言わざる」の三猿が描かれるようになったとされる。（1999：民俗大辞典　上【猿】712 頁）

27. 豊北町史編纂委員会、1972：豊北町史「第九篇　民俗と生活　第二章　年中行事　庚申祭」1024 頁

28. 伊勢神宮を信仰する同信集団。神明講、参宮講、太々講ともいう。伊勢神宮の神威、神徳を、伊勢神宮所属の伝

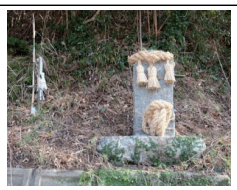
道者御師が各地を巡回して伝え、室町時代から村や町に伊勢講の結成がみられるようになり、江戸時代には全国的な広がりをもつようになった。講の組織は村や町の内部組織である村組や町組単位に結成されることが多く、また講単独の共有財産である講田、講畑、講山の共同経営を通じて団結を強めるとともに、その収入を講運営の諸費用の一部にあてた。年数回の講行事の日には、輪番制の講宿の床の間に伊勢内宮の祭神天照大神、外宮の祭神豊受大神の掛軸を掛けて礼拝し、直会の宴を開き、代参者を決めたりした。代参者は伊勢参り後、帰村して講員に神札を配るが、それは伊勢の神が村にやってくることを意味する。国家最高の神を招き入れ、五穀豊穣、万民豊楽を願ってきた。（2000、2007：日本歴史大事典：【伊勢講】）

29. 特定の日に集まったり、あるいは籠りをしたりすること。講が組織されて行われていることが多い。特に庚申、甲子、巳の日などに集まる日待はよく知られている。そのほかにも正月や五月、九月の一日と十五日も祭神の日で日待が行われた。日待の特徴は月待講と同じように夜の行事であり、一夜眠らずに籠りして明かすこと、日の出を拝して祈ること、そしていくつかの禁忌を伴っていることである。日待はあくまで厳重な精進潔斎にもとづく籠りに本来的な意味があったと考えられている。（2000：日本民俗大辞典　下：【日待】437 頁）
30. 供物に決まりはなく、毎年各家ごとに違うものを持ち寄る場合もある。2022 年の地神祭の供物はバナナ・林檎・大根・蕪・ほうれん草・米・みかん・ナス・じゃかいも・トマト・酒・白菜・里芋・パプリカ・餅・塩・水等であった。このうち、餅は毎年祭りの前日に自治会の女性が集まって作り、祭り後は「神様のお餅」といって各家に切って配られ、無病息災を願い一家全員で食す。
31. かつては神田一ノ宮住吉神社から神官が来ていたが、現在は常駐する神官がおらず、神功皇后社（神田上江尻）の神官が一ノ宮の氏子となる自治会の祭事も取り仕切っている。
32. 庚申塚の通し番号は所在地を確認した順番に付けている。

（引用・参考文献）

1. 豊北町史編纂委員会、1972：豊北町史
2. 豊北町史編纂委員会、1994：豊北町史二
3. 豊北町郷土文化研究会、1987：にぎめ　第 4 号
4. 下関市教育委員会　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム、2014：下関市文化財報告書 35　土井ヶ浜遺跡　第 1 次～第 12 次発掘調査報告書第 1 分冊「本文編」
5. 窪徳忠、1956：庚申信仰　（山川出版社）
6. 窪徳忠、1961：庚申信仰の研究上・下―日中宗教文化交渉史―　（原書房）
7. 五十嵐文蔵、2002：庚申信仰の伝播と縁起　（小学館スクウェア）
8. 岩井宏實監修、2017：絵引　民具の事典　普及版　（河出書房新社）
9. 福田アジオ・神田より子・新谷尚紀・中込睦子・湯川洋司・渡邊欣雄　編、1999：日本民俗大辞典　上　（吉川弘文館）
10. 福田アジオ・神田より子・新谷尚紀・中込睦子・湯川洋司・渡邊欣雄　編、2000：日本民俗大辞典　下　（吉川弘文館）
11. 国土地理院：www.gsi.go.jp
12. Google ストリートビュー：https://www.google.com/streetview/
13. 日立システムアンドサービス、2008：百科事典マイペディア
14. ブリタニカ・ジャパン、2009：ブリタニカ国際大百科事典
15. 小学館、2000、2007：日本歴史大事典
16. 岩波書店、2008、2009：広辞苑第六版
17. 下関郷土会、1974：郷土　第 20 集
18. 下関郷土会、1975：郷土　第 21 集
19. 下関郷土会、1979：郷土　第 25 集

【表３】豊北町内庚申塚一覧　（2021 年 1 月 ~2021 年 12 月調査による）

地区	No	小字	画像 1	刻字	数	幅（cm）	高（cm）	基壇	飾りの種類	造立地	所在地・備考
神田上	1	波原			1			無	①	民家入口	旧道沿い。花筒あり。
	2	江尻上			1			2	②	民家入口	江尻上集会所横。
	3	江尻下			1			無	①	路傍	二ノ宮神社御旅所付近。花筒あり。
	4	岡林			1			1	②	路傍	片瀬の庚申。
	5	岡林		庚申	1	37	70	1	①	路傍	土井ヶ浜海水浴場入り口前。
	6	下田			1	54	94	無	①	路傍	横にお大師あり。
	7	津波敷			1			1	①	路傍	赤間関街道の看板付近。
	8	寺川			1			1	①	路傍	寺川地区旧道沿い道路防壁上。

飾りの種類
①注連縄をかけ、申緒を置いたもの　②石塔上部に注連縄のみかけているもの
③石塔の横、あるいは正面に御幣を立てているもの　④それ以外の特徴を持つもの

※計測値は豊北町史二（1994）「九 文化財 2 石造物・喚鐘等（11）庚申塚」（1173～1177頁）及びにぎめ第4号「庚申塚」庚申信仰とその周辺（1987：沼尻正夫）を参考にしているものもある。数値のないものは未計測。

【表３】豊北町内庚申塚一覧　（2021 年 1 月 ~2021 年 12 月調査による）　つづき

地区	No	小字	画像 1	刻字	数	幅（cm）	高（cm）	基壇	飾りの種類	造立地	所在地・備考
神田上	9	直子		道祖神	1	16	43	祠	①	路傍	堀切に向かう四辻。
	10	直子			1			1	②	路傍	県道39号線沿い。農免道路入口。
	11	直子			1			1	②	路傍	県道39号線沿い。
	12	岡林			1			無	①	路傍	土井ヶ浜海水浴場駐車場付近。
	13	岡林			1			1	①	路傍	釜蓋の庚申。
	14	江尻下			1			2	①	路傍	土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム駐車場入口前。
	15	波原			1			1	①	路傍	
	16	西沢			1			1	①	路傍	西沢口付近。「平成八年一月」と書かれた花筒がある。

飾りの種類
①注連縄をかけ、申緒を置いたもの　②石塔上部に注連縄のみかけているもの
③石塔の横、あるいは正面に御幣を立てているもの　④それ以外の特徴を持つもの

※計測値は豊北町史二（1994）「九 文化財 2 石造物・喚鐘等（11）庚申塚」（1173～1177頁）及びにぎめ第4号「庚申塚」庚申信仰とその周辺（1987：沼尻正夫）を参考にしているものもある。数値のないものは未計測。

【表 3】豊北町内庚申塚一覧　（2021 年 1 月 ~2021 年 12 月調査による）　つづき

地区	No	小字	画像 1	刻字	数	幅（cm）	高（cm）	基壇	飾りの種類	造立地	所在地・備考
神田上	17	根崎			1			1	①	路傍	空き瓶で作られた花筒あり。
	18	河原			1			不明	不明	水田横	害獣用の柵があり、近付くことが出来ない。縄のようなものがかけられていることが確認できる。
	19	辻ヶ畑			1			1	②	路傍	横にお大師あり。
	20	辻ヶ畑			1	42	80	1	②	路傍	ペットボトルの水が供えられている。
	21	津波敷			1	30	120	1	②	路傍	国道191号線より津波敷地区への入口。 朽ちていたが、注連縄がかけられていたと思われる。
神田	1	肥中		庚申	1			無	②	路傍	「赤間関街道　苅束峠・肥中」看板付近。 注連縄は細く、背面から針金で吊り下げ、前面のみに巻かれている。
	2	肥中			1			1	無	路傍	「肥中街道　肥中石畳」入口。
	3	大川			1			1	②	路傍	注連縄は漁網のような丈夫な素材で作られている。

飾りの種類
①注連縄をかけ、申緒を置いたもの　　②石塔上部に注連縄のみかけているもの
③石塔の横、あるいは正面に御幣を立てているもの　　④それ以外の特徴を持つもの

※計測値は豊北町史二（1994）「九 文化財 2 石造物・喚鐘等（11）庚申塚」（1173～1177頁）及びにぎめ第4号「庚申塚」庚申信仰とその周辺（1987：沼尻正夫）を参考にしているものもある。数値のないものは未計測。

【表 3】豊北町内庚申塚一覧　（2021 年 1 月 ~2021 年 12 月調査による）　つづき

地区	No	小字	画像 1	刻字	数	幅（cm）	高（cm）	基壇	飾りの種類	造立地	所在地・備考
神田	4	堀越		道祖神	1	17	42	1	無	路傍	堀越峠旧道沿い。
	5	附野			1			祠	②	山べり	石祠の中にある。自治会で庚申様として祀っている。
滝部	1	神田口			1	49	120	1	④	路傍	神田口入口。横に三界萬霊地蔵あり。
	2	上市			1			1	②	路傍	市守神社付近。花筒あり。後日訪れるとペットボトルの水が供えられていた。
	3	高良			1	85	104	1	④	川べり	高良自治会館付近。花筒有り。榊が生けられている。
	4	寺地			1			1	①	路傍	寺地公民館付近。
	5	久森			1			1	②	路傍	久森交差点付近。花筒あり。周囲はコンクリートで舗装されている。舗装面に「平成25年1月31日」と彫られている。
	6	境下			1			2	②	山べり	清水寺付近。

飾りの種類
①注連縄をかけ、申緒を置いたもの　②石塔上部に注連縄のみかけているもの
③石塔の横、あるいは正面に御幣を立てているもの　④それ以外の特徴を持つもの

※計測値は豊北町史二（1994）「九 文化財 2 石造物・喚鐘等（11）庚申塚」（1173～1177頁）及びにぎめ第4号「庚申塚」庚申信仰とその周辺（1987：沼尻正夫）を参考にしているものもある。数値のないものは未計測。

【表３】豊北町内庚申塚一覧　（2021 年 1 月 ~2021 年 12 月調査による）　つづき

地区	No	小字	画像１	刻字	数	幅（cm）	高（cm）	基壇	飾りの種類	造立地	所在地・備考
滝部	7	中村		道祖 2003　西 (祖の刻字の裏面)	1			1	無	路傍	豊北総合グラウンド内。二つの石が並べられ、それぞれに「道」と「祖」と「祖」という字が書かれている。
	8	高良			2	38 23	68 60	2	無	路傍	地蔵の横に二体並べて置かれている。花筒のような竹筒あり。
	9	高良		庚申	1	55	96	1	無	山べり	横に石灯籠あり。
	10	中原			1			無	②	路傍	
	11	中村		猿田彦大神 天明三癸卯 十二月吉日 （側面）	1	25	77.5	1	無	山べり	豊北総合グラウンド、豊北中学校へ向かう道の入口。
田耕	1	上太田			1			1	②	路傍	上太田自治会館前。横に六地蔵あり。
	2	下太田			1	53	94	1	②	路傍	横に三界萬霊地蔵あり。
	3	市庭			1	43.5	70	無	①	山べり	パーキングエリア内。

飾りの種類
①注連縄をかけ、申緒を置いたもの　　②石塔上部に注連縄のみかけているもの
③石塔の横、あるいは正面に御幣を立てているもの　　④それ以外の特徴を持つもの

※計測値は豊北町史二（1994）「九 文化財 2 石造物・喚鐘等（11）庚申塚」（1173～1177頁）及びにぎめ第4号「庚申塚」庚申信仰とその周辺（1987：沼尻正夫）を参考にしているものもある。数値のないものは未計測。

【表３】豊北町内庚申塚一覧　（2021 年 1 月 ~2021 年 12 月調査による）　つづき

地区	No	小字	画像 1	刻字	数	幅（cm）	高（cm）	基壇	飾りの種類	造立地	所在地・備考
田耕	4	杣地			1	45	110	2	②	路傍	宗要寺付近。
	5	杣地			1	52	109	1（石囲い）	②	路傍	
	6	杣地			1	55	66	1	②	路傍	
	7	杣地			1	48	107	1	②	水田横	基台が柵囲いのような特徴的な形をしている。
	8	市庭			1	54	70	1	②	路傍	周囲はコンクリートで舗装されている。舗装面に「平成27年10月」と彫られている。 酒が供えられている。
	9	朝生			1	45	80	無	②	川べり	
	10	朝生		庚申	1	48	141	2	①	民家入口	
	11	朝生			1			御堂	④	山べり	朝生自治会館付近の御堂。

飾りの種類
①注連縄をかけ、申緒を置いたもの　②石塔上部に注連縄のみかけているもの
③石塔の横、あるいは正面に御幣を立てているもの　④それ以外の特徴を持つもの

※計測値は豊北町史二（1994）「九 文化財 2 石造物・喚鐘等（11）庚申塚」（1173～1177頁）及びにぎめ第4号「庚申塚」庚申信仰とその周辺（1987：沼尻正夫）を参考にしているものもある。数値のないものは未計測。

【表 3】豊北町内庚申塚一覧　（2021 年 1 月 ~2021 年 12 月調査による）　つづき

地区	No	小字	画像 1	刻字	数	幅（cm）	高（cm）	基壇	飾りの種類	造立地	所在地・備考
田耕	12	朝生			1	46	109	石囲い	①	水田横	
	13	朝生			1			石囲い	無	水田横	見守り地蔵付近。
	14	原			1	40	105	無	①	路傍	
	15	下太田			1	45	80	1	無	川べり	
	16	川中曽			1	33	93	1	無	路傍	
	17	川中曽			1	49	94.5	1	無	路傍	継石といわれる。区画整理の時に移動させたとのこと。鹿に倒されたことがあるので、コンクリートで接着している。
	18	朝生			1			石囲い	無	民家敷地内	個人宅の敷地内にある。住民曰く虚無僧の墓との事なので、近所の方の思い違いか。
	19	小野			1	50	119	1	①	路傍	付近に三界萬霊地蔵あり。

飾りの種類
①注連縄をかけ、申緒を置いたもの　②石塔上部に注連縄のみかけているもの
③石塔の横、あるいは正面に御幣を立てているもの　④それ以外の特徴を持つもの

※計測値は豊北町史二（1994）「九 文化財 2 石造物・喚鐘等（11）庚申塚」（1173～1177頁）及びにぎめ第4号「庚申塚」庚申信仰とその周辺（1987：沼尻正夫）を参考にしているものもある。数値のないものは未計測。

【表３】豊北町内庚申塚一覧　（2021 年 1 月 ~2021 年 12 月調査による）　つづき

地区	No	小字	画像 1	刻字	数	幅（cm）	高（cm）	基壇	飾りの種類	造立地	所在地・備考
田耕	20	小野		大正十四年 八月十日定 之 道願 六月二十六 日記（側面）	1			1	無	山べり	近隣の住民曰く、もともとは大きな石があったが、何かで落ちて割れたので、新たに角柱形の石を作ったらしいとのこと。
北宇賀	1	下畑			1	86	102	1	①	路傍	
	2	寺畑			1			1 （石囲い）	①	山べり	
	3	寺畑			1			1	①	山べり	付近に地蔵あり。
	4	寺畑			1			無	①	路傍	
	5	下畑		庚申	1	76	133	1	①	路傍	
	6	上畑			1	41	118	石囲い	①	路傍	四葉農園付近。横に三界萬霊地蔵あり。
	7	上畑			1	51	89	1	①	路傍	花筒あり。

飾りの種類
①注連縄をかけ、申緒を置いたもの　②石塔上部に注連縄のみかけているもの
③石塔の横、あるいは正面に御幣を立てているもの　④それ以外の特徴を持つもの

※計測値は豊北町史二（1994）「九 文化財 2 石造物・喚鐘等（11）庚申塚」（1173～1177頁）及びにぎめ第4号「庚申塚」庚申信仰とその周辺（1987：沼尻正夫）を参考にしているものもある。数値のないものは未計測。

【表 3】豊北町内庚申塚一覧　（2021 年 1 月 ~2021 年 12 月調査による）　つづき

地区	No	小字	画像 1	刻字	数	幅（cm）	高（cm）	基壇	飾りの種類	造立地	所在地・備考
北宇賀	8	上畑			1			1	①	山べり	
	9	上畑			1	43	76	1	②	水田横	常光庵付近。
	10	掛地			1	72	135	石囲い	②	路傍	赤間関街道馬路垰入口。注連縄は丈夫な素材で作られている。地域住民の話によると、稲作をおこなわなくなり藁が取れなくなったので、縄は変えずに毎年の祭りでは御幣と紙垂だけ作り直すとのこと。
阿川	1	大曲			1	46	120	1	①	路傍	横に六地蔵の石幢あり。
	2	大曲		庚申	1	50	120	1	①	路傍	基台に御幣や榊が挿せるようになっている。
	3	河内		道祖神	2	50 35	80 130	1	無	路傍	左の石塔は割れている。
	4	河内		猿田彦大神	1	45	100	1	①	山べり	花筒あり。
	5	土井		庚申	1	54	137	1	①	路傍	酒（あるいは水）が供えられている。

飾りの種類
①注連縄をかけ、申緒を置いたもの　　②石塔上部に注連縄のみかけているもの
③石塔の横、あるいは正面に御幣を立てているもの　　④それ以外の特徴を持つもの

※計測値は豊北町史二（1994）「九 文化財 2 石造物・喚鐘等（11）庚申塚」（1173～1177頁）及びにぎめ第4号「庚申塚」庚申信仰とその周辺（1987：沼尻正夫）を参考にしているものもある。数値のないものは未計測。

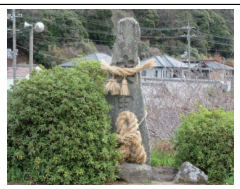
【表 3】豊北町内庚申塚一覧　（2021 年 1 月 ~2021 年 12 月調査による）　つづき

地区	No	小字	画像 1	刻字	数	幅（cm）	高（cm）	基壇	飾りの種類	造立地	所在地・備考
阿川	6	土井		天明三癸卯 猿田彦大神 施主　秋枝正之	1	30	90	1	①	山べり	供物用と見られる皿と瓶が置かれている。
	7	小瀬戸		庚申	1	53	130	1	無	路傍	台座に「下市 小瀬戸 中」と刻字あり。
	8	河内		庚申塚	1	54	137	1	③	路傍	注連縄や申緒は無く、御幣のみ立てられている。
	9	大浦		庚申	1			2	①	路傍	大浦地区入口。横に地蔵あり。
	10	上市		庚申塚	1	55	157	1	①	川べり	日ノ出橋袂。対岸に石の御堂と墓石が立っている。
	11	立目		幸神 右 つくの （側面）	1	36	92	4	①	川べり	嘗ては庚申塚と道標は道を挟んで対になるように立てられていたようだが、現在は隣り合って立てられている。
	12	細井		猿田彦大神	1	54	185	1	①	路傍	医王庵入口。花筒あり。
	13	飯塚		庚申	1			2	①	路傍	

飾りの種類
①注連縄をかけ、申緒を置いたもの　②石塔上部に注連縄のみかけているもの
③石塔の横、あるいは正面に御幣を立てているもの　④それ以外の特徴を持つもの

※計測値は豊北町史二（1994）「九 文化財 2 石造物・喚鐘等（11）庚申塚」（1173～1177頁）及びにぎめ第4号「庚申塚」庚申信仰とその周辺（1987：沼尻正夫）を参考にしているものもある。数値のないものは未計測。

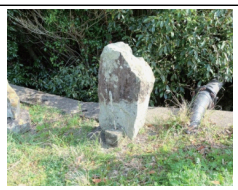
【表３】豊北町内庚申塚一覧　（2021 年 1 月 ~2021 年 12 月調査による）　つづき

地区	No	小字	画像１	刻字	数	幅（cm）	高（cm）	基壇	飾りの種類	造立地	所在地・備考
阿川	14	野地		幸神	1	40	137	無	①	川べり	大浦岳森林公園登山口付近。
	15	野地		幸神	1	65	112	無	②	路傍	
	16	河内		不明	1	45	125	不明	無	水田横	害獣用防護柵で囲まれた休耕田の中にあるため近付くことができない。
	17	河内		幸神　天保酉十月	1	33	195	1	③	路傍	横に地蔵あり。 注連縄や申緒は無いが御幣があり、榊が供えられている。
粟野	1	市の瀬		道祖神（左） 幸神（右）	2	60	130	1	無	路傍	石塔が二つ並びあって立っている。
	2	郷西上		猿田彦命	1	80	170	1	②	神社境内	粟野八幡宮境内。
	3	郷東		庚申	1	77	210	1	①	川べり	粟野橋袂。
	4	郷東		庚申	1			1	③	路傍	横に石祠あり。石祠には注連縄有り。石塔には注連縄も申緒も無いが、御幣が挿されている。

飾りの種類
①注連縄をかけ、申緒を置いたもの　②石塔上部に注連縄のみかけているもの
③石塔の横、あるいは正面に御幣を立てているもの　④それ以外の特徴を持つもの

※計測値は豊北町史二（1994）「九 文化財 2 石造物・喚鐘等（11）庚申塚」（1173～1177頁）及びにぎめ第4号「庚申塚」庚申信仰とその周辺（1987：沼尻正夫）を参考にしているものもある。数値のないものは未計測。

【表３】豊北町内庚申塚一覧　（2021 年 1 月 ~2021 年 12 月調査による）　つづき

地区	No	小字	画像１	刻字	数	幅（cm）	高（cm）	基壇	飾りの種類	造立地	所在地・備考
粟野	5	安崎		猿田彦（命？）	1			無	②	路傍	安崎地区入口。
	6	郷西上			1			無	無	水田横	古い御幣が置かれているのみで、現在は祀られていない。（2019年まではモリサマと一緒に祭祀されていた）
	7	安崎		猿田彦大神	1			無	②	路傍	安崎自治会館前。
角島	1	辻方		猿田彦大神 天保十年	1	60	160	1	④	路傍	
	2	前方		猿田彦	1	48	180	2	④	路傍	角島八幡宮付近。横に石灯籠が立っている。
	3	後方		猿田彦	1	50	170	4	④	路傍	角島八幡宮付近。横に道路竣工記念碑が立っている。
	4	辻ヶ浜		申	1	50	200	1	④	路傍	浄楽寺付近。漁網を綯っている。「袈裟がけ庚申」と呼ばれる。 嘉永三年造立とされている。

飾りの種類
①注連縄をかけ、申緒を置いたもの　②石塔上部に注連縄のみかけているもの
③石塔の横、あるいは正面に御幣を立てているもの　④それ以外の特徴を持つもの

※計測値は豊北町史二（1994）「九 文化財 2 石造物・喚鐘等（11）庚申塚」（1173～1177頁）及びにぎめ第4号「庚申塚」庚申信仰とその周辺（1987：沼尻正夫）を参考にしているものもある。数値のないものは未計測。